

小学生の野球に携わって学んだこと

—その3 大人に見えない子どもの世界—

三 浦 捷 也

(三浦歯科医院 院長)



小学生の野球に携わり40年。卒団者は650名を超えた。愛すべきかわいい野球少年と向き合い、思いも寄らず、「大人に見えない子どもの世界」があることをたつぷりと体験した。子どもが伝えたがっていること、話したがっていること、ほめてほしいと思っていること、驚いてほしいと思っていること、それらをどんどん引き出してやることの大切さを学んだ。

そのためには、子どもの気持ちを察し、受けとめてやる大人側の感受性が日頃から磨かれていなければならないことを思い知らされた。改めて小学生スポーツ指導の難しさを知る。

子どもたちは練習中、様々なことを投げかけ、語りかけてくる。その時には決して無視をせず、子どもが何を伝えたがっているかを見つけ、聞いてやるように心掛けてきた。

日常の親と子どものちょっとした会話のなかにも、無視できない一言一言がころがりこんでいるはずだ。スポーツの指導だけではなく、親も学校の先生も、そこにしっかりと目を向けてほしいと思う。

— 今どきめずらしいガキ大将のA君 —

A君は練習が待ち切れず、練習開始30分前に友人を引き連れてグラウンドに到着。監督気分であれこれと指示を出し、ノックを始める。言葉遣いも乱暴で、行動もパワフルで、いささか身勝手なところもみられる。でも、無類のお人好しである。三浦理事長好みの愛すべき「ガキ大将」でもある。高校ではラグビーに挑戦し、今は土木関係の仕事に就き、リーダーとして元

気に仕事をしている。街でたまに会うと、「理事長、元気で頑張れよ！」といつも逆に励まされる。何ぼになってもA君はガキ大将である。

— 野球が大好きなO君 —

O君は運動は得意ではないが、野球が大好きで、プロ野球のことは驚くほど詳しい。いつもプロ野球選手名鑑を持ち歩いていた。おとなしく優しい性格なので、練習中、団員にからかわれたり、いたずらされたりで、ちょっとハラハラすることもあるが、当の本人はいつもニコニコし、気にせずみんなと楽しそうに練習をしていた。紅白戦でクリーンヒットを打ち、コーチにほめられたことが嬉しかったようだ。翌日、お父さんとバッティングセンターで特訓したことを嬉しそうに話をしてくれた。O君は団員から愛され、不思議な存在感がある。グラウンドから遠く離れたところから、そっと見つめていたお父さんの姿が印象に残っている。

— バッタを追いかけるS君 —

S君は小鳥や花に殊のほか興味をもっている団員である。グラウンドに到着すると、練習そっちのけでバッタを追いかける。他の団員とのこともあり、S君に「今は練習中だから、バッタを追いかけるのは練習が終わってからにしよう」と伝える。練習が終わると、私に虫のことや花のことを矢継ぎ早に質問する。S君は理事長だから何でも知っていると思い違いしているようだ。S君に「理事長は花のことも小鳥のこともさっぱりわからない。ごめん」と率直に謝ると、「そうか」と言って、またバッタを追いかける。



紅白戦ではボールボーイとして大活躍し、団員から一生懸命さが認められ、「最優秀敢闘賞」を受賞。トロフィーを手にし、テレながらも得意げにVサインをしていた姿が忘れられない。S君は「小鳥博士」として、一目置かれていた。

— 聴覚に障害のあるT君 —

T君は聴覚に障害があり、聾学校に通っていた。T君は学校以外では初めての集団生活だったので、入団当初は団員と打ち解けることができなかったが、徐々に慣れ、何の支障もなく練習していた。介添え役として弟のM君も一緒に入団した。M君は練習中思うようにならずイライラするお兄さんを必死になだめていた。逆に野球センスのいいお兄さんは、弟に身振り手振りでバッティングの指導をする。二人のさりげない、ちょっとした行動やしぐさが団員にとって、きっと生きた教科書の役割になっていたと思う。その後二人には会う機会がないが、どんな兄弟になっているのか、その成長ぶりが特に気になる。

— 初めて合宿を体験するK君 —

K君は、団員の紹介で途中から入団した。すぐに能代市のアリナスで合宿があったが、お母さんから「バスに酔うし、お風呂にみんなと一緒に入るのが嫌みたいなので、合宿は欠席します」との連絡があった。欠席扱いにしていたが、前日にK君が直接電話で、「もしもし、理事長ですか。僕、合宿に行くことにした」と言ってきた。私は飛び上がるほど嬉しかった。K君に「理事長はK君と一緒に合宿に行くことを楽しみにしているよ」と伝えたら、K君は「うん」とだけ言って電話を切った。初めて両親から離れて合宿することへの不安は、K君にとって想像以上だったと思う。「合宿参加」は必死の決断だったのだろう。後にお母さんは、「Kは、人見知りで消極的な子だったが、合宿以来、と

ても積極的に行動するようになりました」と話しておられた。子どもたちのちょっとした些細なことにもスポーツの果たす役割があるのだろう。K君は雰囲気慣れるまでは、理事長とのキャッチボールを楽しみに練習に来ていたが、卒団時には格好いい野球少年に成長していた。

「この頃の子どもは何を考えているかわからない」と耳にすることが多くなった。また近年、親子の寒々とした事件も相次ぎ、気がかりな点も少なくはないが、団員同士が練習中、無邪気にボールを追いかけている姿を目の当たりにすると、かつて私たちが三角ベースに興じていた頃と何ら変わっていないように思える。確かに、年寄りの私からみれば、現代っ子は知識が豊富で物知りだが、理屈っぽいところもあり、違和感を覚えることもある。でも、総じて子どもたちは自己肯定感が高く、自分の考えをしっかりと持ち、「たくましさ」も「素直さ」もある。同時に、どの子どもたちも一様に輝く可能性を秘めている。

私は「競うこと」「比べること」よりも、「子どもを信頼し、その良さを伸ばすこと」「仲良く助け合うこと」を最優先に接してきた。溺愛することでもなく、厳しく叱咤するのでもなく、「愛情をもって、その子なりの位置にきちんと位置付けたうえで、その子と接すること」が大切なように思える。それは「子どもの世界には、大人に見えない子どもの心」があるからである。親しい友人からは「お前の指導は甘い。スポーツの指導とは言い難い」と言われるが、でも素直には受け入れられない。

野球を通して共に過ごした、子どもたちの屈託のない素顔と笑顔が私の生活や活動の基点となっている。小学生の野球に携わり、子どもたちから多くを学び、大人の有様を知る。